

## 肢体不自由者のスポーツ継続に関するモチベーション

専攻 特別支援教育学  
 コース 心身障害コース  
 学籍番号 M08093G  
 氏名 大川 まみ

### 第1章 問題の所在と目的

近年、学校体育においては新たに「生涯にわたって運動に親しむ」ことが目標に取り入れられている。それによって、ますます生涯スポーツの視点が重視されると思われる。

スポーツとは、単に体力向上のためのものではなく、QOL (Quality of Life) を向上させるものであると考えられ、新たな学校体育の目標は肢体不自由児にとっても重要な課題であるとする。

身体活動・運動が肢体不自由者にもたらす効果については、これまでに多くの研究が行われており、その効果が明らかになっているものの、身体障害者のスポーツ実施率は高いとはいえない現状である。肢体不自由児・者の個人的属性はさまざま、その違いは大きく、渡 (2005) が述べているように、障害者不在の障害者スポーツ論にしないためには彼らの経験が何をもたらしているのかを詳細にみていくことが求められていると考える。

そこで本研究では、現在、スポーツに継続的に取り組んでいる肢体不自由を持つ成人の語りから、スポーツ参加・継続のプロセスを明らかにし、そのプロセスから彼らのモチベーションを探るとともに、スポーツ参加・継続の促進にむけての今後の課題について検討することを目的とする。

### 第2章 研究方法

#### 1 対象者

スポーツに継続的に取り組んでいる肢体不自由者5名。

#### 2 調査方法

面接によるインタビュー調査

#### 3 分析方法

分析方法はグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることとした。

### 第3章 結果と考察

対象者Aの分析結果である、パラダイム、関連図、ストーリーライン (略) を以下に示す。

Table 1 対象者Aのパラダイム

パラダイム	同じようにしたいという思いの定着	スポーツのきっかけと意識
状況	子どもの頃のリハビリと母親の記憶	こだわりの変化と理由
行為/相互行為	受け入れられた記憶と先生との関わり 受け入れられなかった記憶と先生との関わり 同じようにしたい 体育	一緒に活動する楽しみ スポーツのきっかけ・意識
帰結	冒険への思い	アクセステイニングによる心理的解放

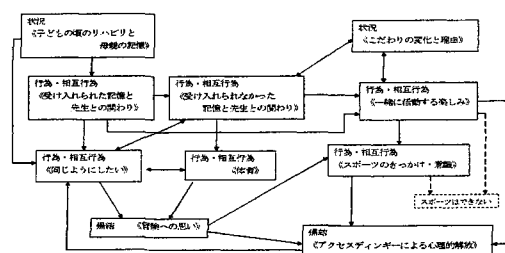


Fig.1 対象者Aのスポーツ継続のプロセス

#### ストーリーライン

##### 肢体不自由者のスポーツ参加・継続へのプロセス

パラダイム【 】, サブカテゴリー《 》, ラベル〈 〉, プロパティ“ ”, デイメンション ( )

Aさんが子どもの頃の「リハビリの度合い」は(高)く、「苦痛度」も(高)いものであったが、「母親の努力」は(大きく)、「思いの強さ」は「強い」。〈保護者の思いはみんなと同じように) というものであり、このような《子どもの頃のリハビリと母親の記憶》はAさんが《同じようにしたい》という思いを抱くことにつながっている。

そろばん教室での周囲との関係と《学校での状況》の対比からさらに《同じようにしたい》という思いを強化し、【同じようにしたいという思いの定着】につながった。

中学校に進学した頃も、みんなと《同じようにしたい》という思いからの《自分でやることへのこだわり》は強く、「みんなと同じことばかり求めるんじゃなく工夫したりして楽になることがあればそっちを選んだよ」という《中学の担任の助言》は《受け入れられなくてけんか》もした。そのような時期に、違いの明らかな状況にもかかわらず、「ちょっとやってみ」と自分でやらせてもらえた《体育は冒険できる》

と感じており、このような〈自分でやることへのこだわり〉や〈体育は冒険できる〉といった思いはAさんの《冒険への思い》となり、後にアクセスディンギーの継続にも関係すると考えられる。

しかし、中学校・高等学校でAさんの《同じようにしたい》という思いからの〈自分でやることへのこだわり〉にも変化がおこることになる。“体調”を崩して入院したことから“身体の限界への感覚”を感じたり、“授業での遅れ”が〈増大〉していくというような〈自分ではどうしようもない状況〉のなかで〈障害と向き合う機会が増えた〉。それにより〈自分の状態への気づき〉があり、「みんなと同じようにできやんこともある」ということが〈自分の中での明確化〉した。

この〈自分の中での明確化〉により、〈受け入れられなくてけんか〉した“先生の助言に対する気持ち”は〈正しい〉、〈認めなければ〉と変化しており、「荷物を持ってもらうとか、歩くの楽にするとか」といったそれまで思っていた〈甘えるが工夫に〉変化した。“車椅子の効果”も〈体力温存〉でき〈授業に出られる〉ようになるなど「嬉しい」ものであり、〈車椅子で生活する〉という“自分の出した結論”に至る。「体力に余力があって」と感じた“結果やりたいと思ったこと”は〈部活〉であった。

大学での生活は高校までとは違い、授業や部活などを〈自己選択する活動〉となったこともこだわりを変化させた理由であった。

大学の部活で《一緒に活動する楽しみ》を得ることができたことで、〈できないなかでも楽しむ〉という“生き方・意味”をみつけたとAさんは語っている。しかし、そんななかでも“演奏の困難度”の〈高〉さからの〈同じようにできない〉という状況は存在しており、〈みんなで楽しむ喜び〉は可能になっても「ソロで弾けたらカッコいいな」というような〈主役への憧れ〉は〈求めてはいけなない鬱な悩み〉として押し殺している。

Aさんの【スポーツのきっかけと意識】は、大学時代までの成長のなかで感じていた“障害者とボランティアという関係への違和感”や〈友人関係についての思い〉から“友だちとしての感覚”を求めて行なった大学での〈さまざまな活動〉が〈スポーツ参加のきっかけ〉であった。アクセスディンギーに初めて乗ったAさんは大学に入るまでは〈スポーツという意識〉がなかった。それは、“体力”が〈無〉いと思っていたことと、“スポーツをすること”は〈無理〉だと思っていた

たからである。また、大学で車椅子バスケットの人の〈話を聞くことが興味につながった〉が〈スポーツ参加に至らなかった理由〉は自身との“障害の状態の違い”の〈大〉きさであった。アクセスディンギーでのセーリングでの初めての感想は「なんとなく面白そう」といったものであり、“参加した後の変化”は〈大〉きく、スポーツが〈できるに変化した意識〉について語っている。また、〈子どもの頃のスポーツの成績〉は〈低〉いものであったが、これに対して“ディンギーで得たもの”の一つとして〈成果の得られる空間〉を挙げている。

Aさんが“ディンギーで可能になったこと”は、〈全部自分でする〉ことや〈自分が主役になる〉ということであり、みんなと〈同じ土俵〉に立ち、〈自信〉と〈楽しさ〉を得ている。また、“協調の必要性”から押し殺すようになっていた〈上を目指す〉ことに対して〈まずいことではない〉という“思いの肯定”を行なっている。また、自身が〈上を目指す場所〉は“限られること”であると考えており、アクセスディンギーは〈自分の思いをかなえられる場〉であるとして《アクセスディンギーによる心理的解放》を行なっている。

Aさんはいま、〈みんなと一緒に〉という思いと、〈上を目指す〉という〈両方の思いの成長〉が“自己の成長に必要なもの”だと感じている。

#### 第4章 総合考察

第3章の検討をもとに対象者間での比較により考えられる共通性を探った結果、障害者／健常者といった枠組みを取り除いたスポーツ活動の必要性が示唆された。この課題に対しては、小児期からの体験の必要性が高いと思われる。障害者のスポーツ指導に関する科目を体育教員養成に課すだけでなく、これからの特別支援教育の現場である全ての学校で障害児と健常児がともに活動し、学んでいくためには結果のフィードバックまでも考慮した柔軟なカリキュラムが必要であると考えられ、今後さらに研究が進められる必要があることが示唆された。

主任指導教員 鳥越隆士  
指導教員 高野美由紀